

〈資料〉

私説・北海道の児童文学史（二）

大西 久男

はじめに

前回筆者は、児文協本部の北海道講演会との出会いから、児文協の会員となり、やがて道支部の機関誌『にれの木』（現在は「北海道児童文学」と改称）の編集を担当することになった状況などについての記述が中心であったように思われる。

その間、いろいろ人間関係のかかわりの中から物事は推進していくものであることを実感させられたことも事実である。

さて、前回ひとつの組織を中心に記述した傾向が強いと思われるので、前回ふれたように「北海道の児童文学の動きを考える場合、児文協道支部だけがその役割を負っているわけではない。当然他のグループや、時には個人としての活動などが大きく影響をもたらしている」と考えられるので、今回は可能なかぎり、その方向ですめたいと考えるのだが、果たしてそのようになるかどうか。

個人の創作出版などについては『北海道の児童文学』（にれの樹の会編・北海道新聞社・昭59）やその他の既刊書に述べられているので、それらのことに関しては、既刊書に譲ることにして、今回は別の側面から視ていきたいと思う次第である。

（一）

私が坪田譲治氏らを中心とした、日本児童文学者協会の北海道講演会に出会ったのが、前回記述したように一九五六年（昭31）で、その翌年だと思うが、児文協の会員になる。

ところが、会員になったばかりのそれこそ駆け出し新人の私にとっては、児童文学の世界は分からないことばかりであった。

そうしている時に、旭川の諸角和儔氏から評論誌が送られて来たのである。

『児童文学評論』という名称のシャレタ雑誌であることに、まず驚いた。昭和三十三年のことである。それまで商業誌は別として、児童文学関係の同人誌はほとんどがガリ版刷りが多かったから、『児童文学評論』を手にした時、はじめに思ったことは「どのくらいかかったのだろう」つまり資金のことだった。浅ましいと思うだろうが、正直なところそんな気持が頭をよぎったことを、はっきり覚えている。

とにかく日本で唯一の児童文学の評論誌であり、創刊号の編集後記には和田徹三氏と具体的にすすめて来たこと記されている。

創刊号の内容をみても執筆陣の顔ぶれをみてまた驚いた。

山室静、鳥越信、安藤美紀夫、塚原亮一、和田徹三、船木枳郎、関英雄という執筆陣の豪華さにびっくりした。在道の人は安藤美紀夫、和田徹三の両氏だけで、あとは中央で活躍している人ばかりである。旭川から出た雑誌に、このような人が寄稿してくれるのかと、駆け出しの私には不思議というか、それよりも発行者の諸角和儔という男は、俗に言う「へやり手」なのか、とそんな感じを持ったことも、今にして想い出せばむしろ懐かしい気がする。

さて、創刊号で和田徹三氏は「子供の詩をめぐって」と題した論評を執筆している。

氏は長い間「北海タイムス」で子どもの詩の選者をしていた関係もあってか、子どもの詩に対し、詩人としての立場からも深い関心を寄せていたものと思われる。

その頃、和田氏はハーバード・リードの『現代詩論』の訳書を刊行して、詩人の間で評判になっていた時である。筆者も学生の時から下手くそな詩を書いていたから、詩に対する関心も強くあった。私にしてみれば、児童文学より詩の方が先に関心事になっていたのである。

そんなことはともかくとして、前回にふれたように、坪田譲治さんたちの講演会のあとで、私を呼び止めた主催者の一人が和田徹三氏だと、あとで知ったわけだが、氏が子どもの詩の指導に関心を持つ理由も、児童文学評論の創刊号の論評を読んで理解出来た。

それから少し後になるが、和田徹三氏は少年詩「戦争時代記念博物館」を発表した（『日本児童文学』第11巻第8号）。

これは終戦記念日をむかえた特集記事のひとつとして書いたものだろうが、父親が夢で見た戦争博物館という

ことを、ベトナム戦争と重ね合わせて平和を願う大切さを、子どもたちに訴えかけた作品であるが、このことから、氏がいかに子どもたちに大きな希望を託していたか。

しかし難解な詩を書く和田徹三さんと、子どもの詩を深く理解する和田徹三さんの組み合わせが不思議に思ったその頃のことか思い出されるのである。今にして考えれば当然なことであるのに。

昭和三十年代の初め頃、児童文学の現状として「不振・停滞」という言葉が使われ、一方には「上げ潮」という一見矛盾した二つの言葉が同居している現状が児童文学の現状を表現しているというようなことを、鳥越信が何かに書いていたことを覚えている。

前者は児童文学作家の創造活動に対してであり、後者は大学などにおける児童文学を扱った卒業論文や同人・サークル誌の活発化にともなう児童文学人口の拡大現象に向けられた言葉であろう。

このような情勢の流れの時に続けて出版されたのが、高山毅の『危機の児童文学』と『児童文学の世界』の二冊である。私は書店から入荷の報せを受けて飛ぶようにして行ったことを覚えている。

諸角の『児童文学評論』は、なお更当時の現状をふまえた刊行となったわけで、しかも北海道の一地方都市の旭川から誕生の声を上げたことにも、その意義深さを感じるのだ。

諸角は創刊号に「新美南吉論ノート」を書いているが、そのあとの各号にも論評を執筆しているが、改めて彼の労作をまとめる必要があるう。

彼が旭川から札幌に出て来たのは、昭和四十年頃ではなかったかと思っているが、今はっきりしたことは分らない。

札幌の光塩女子短大保育科の講師を勤めていた。札幌に出て来た関係で、私も彼と会う機会が増えた。

余計なことだが、彼には酔うとおもしろい癖があった。上着のポケットから預金通帳を出して見せるのである。はっきり見せるわけではない。ちらつかせるというのか。そんなしぐさをするのである。

他の人にもそうしたかどうかは分からない。偶然に何かの拍子にポケットから出した時に、私が居合わせただけかも知れない。

金額など見たわけではないから、全く分からないが、そんな愉快な一面があった。

現在私の手元にある『児童文学評論』は十一号（昭和44年9月発行）までで、終刊号（十二号）は昭和四十九年十二月で、未亡人諸角信子さんによって刊行されたという（にれの樹の会「北海道の児童文学」66頁）。

終刊号は残念ながら未見だが、この評論誌の発行には、当時としてもかなりの費用を要したであろう。

創刊の頃、彼は旭川の小学校の教師をしていた。その頃教師の給与は安かった。今の時代と比べると、大変な違いである。そんな時に、シャレタ雑誌を刊行したためか、雑音も耳に入ってきた。

諸角には女性のスポンサーがついているとか、あるいは雑誌刊行の意識は、中央志向だとか何とか。そんな雑音も他人の勝手な想像にすぎないことで、彼の名誉のためにも、そのような雑音を否定したい。

そんな雑音は論外として、諸角の評論誌の全体像はきちんと見直す必要があるし、また彼が札幌に出てからも発行所を旭川にしていたことは、彼にとって旭川の地は、離れられない心のふるさとであったに違いない。

旭川といえば、旭川から出た同人誌に齊藤迪子らの『どさんこ』を思い出す。

昭和三十七年の創刊であるが、この頃の同人誌はみんなガリ版刷りで苦労した。それが当たり前だと思ってい

たのである。

だから昭和三十一年創刊の笠原肇の『まゆ』も、三十二年創刊の滋野透子の『樹』も、いかにガリ版上に鉄筆で文字を書き続けるのに、精力を消耗したか想像出来よう。

資金さえあれば苦労しないだろうが、それが無いから仕方がないのである。

そんな時に『児童文学評論』のような、すてきな雑誌が飛び出たのだから、ガリ版刷りでフーフー言いながら謄写版で刷っていた同人誌の連中も、誰だってショックを受けただろう。当時上等な同人誌の印刷は、タイプ印刷で、活版印刷など同人誌にとっては夢に近かった。

児文協道支部の『にれの木』を編集した時も、タイプライターによるもので、それ以上のことは、不可能なことであった。

現在と比べると大変な違いで、だいたい今はもう謄写版さえ姿を消してしまった。

三十年代の初め頃発行された同人誌も、前出のほかに、北大童研の機関誌がある。

加藤多一も書いているが、北大童話研究会が『童話研究』を創刊したのが、昭和三十一年ということであるが、私の手元にあるのは『童話研究』という名称ではなく、『いっしょ』という名の機関誌で七号（昭和三十五年発行）である。

印刷は北大生協のプリント部なので、ガリ版印刷は専門の人がやったからきれいである。

しかし、大抵の同人誌は仲間がガリ版でやっていた。それが普通であったから、北大童研の場合は恵まれていた方であると思うのである。

『いっしょ』七号を見ると、顧問に砂沢喜代治、斉藤秋男、三宅和夫、鈴木秀一の諸氏が名をつらねている。それぞれの分野で活躍されている学者を、グループの顧問に迎えているのは、児童文学の同人誌や機関誌にはあまり例がない。

学生たちのグループなるが故に、それが可能なのだろう。

『いっしょ』七号によれば、その時の北大童話研究会の委員長は神沢克一である。彼は児文協道支部の最初の作品集『原っぱ』に「かに」という作品を書いている。神経のとぎすまされた、いのちについて考えさせられるすぐれた作品である。彼はこの頃は児文協道支部の会友であったと思う。

その後彼はどんな作品活動をしているのか知りたい一人である。

学生の活動についてはもう一つ、北海道学芸大学札幌分校（現教育大札幌校）に児童文学研究会が出来ていた。この研究会の詳細を知る資料は見当たらないので、ほとんど分からないが、私の手元に昭和三十四年二月にまとめた「研究資料No.1」というガリ版刷り一冊だけが残っている。

この資料の中身は「児童の読書の実態調査」で、マスコミに如何なる反応を示しているか、というサブタイトルがつけられた調査報告である。内容は大変興味のあるもので、当時の子どもがラジオ番組に対する関心度が分かって興味深い。

札幌や札幌近郊、小樽の児童を対象にして調査したもので、実際に足でまとめたものであることは評価されている。このような地道な研究が重要であることを、思い知らされる一冊である。この資料作成責任者は田中保とあることを付記しておきたい。

ガリ版印刷といえば、詩人浅野明信の『童話と小説』という個人誌をあげておきたい。

浅野明信は詩誌『北海詩人』を出し続けている気力旺盛な詩人としても知られ、自分個人の詩集も最多数刊行の詩人であるが、『童話と小説』を発行した昭和三十七年頃は、児文協の会員であった筈である。創刊号は印刷屋にやってもらったのはいいが、経済的にも大変なので、遂に自分でガリ版印刷機を店屋から借金して買ったと、浅野は同誌の二号に、泣き言のように正直に書いているのには、私もへほんとうに、そうだよなァと同じ感慨におちこんでしまうのだ。

『森の仲間』が世に出たのは昭和三十六年四月だが、そのいきさつについては玉川雄介が同誌34号（平成八年十二月発行）に簡単に書いているので分かるが、『森の仲間』が発行することが出来たのは、正直なことを言う、同人の中心人物である和田義雄が、雑誌発行の費用の半分を負担することとなったからである。もちろん、前提としては、原稿が集まらなければならない。

最初の同人十名の中で、経済的に豊かな和田義雄の好意に甘えたわけで、和田の好意は創刊号から21号まで続いた。

21号までというのは、和田義雄は昭和五十九年十月十日に病死してしまったからで、22号は和田義雄追悼号として、一周忌に間に合わせて発行した。これも事務局をひき受けていた渡辺ひろし（故人）の尽力によるものであると言っても過言ではない。

渡辺ひろしは、北海道の児童文学を語る場合、避けられない人間の一人であると思っている。彼については、のちほど記述したい。

和田義雄についても少しふれて置きたい。『森の仲間』追悼号にも書いたことだが、彼が入院する前、どこかの病院がいいだろうかと相談されたことがあった。

たまたま私はその時、『北海道医師会史』の編纂と執筆にかかわっていて、医師会側との打合せを何度か重ねていたので、何人かの医師に聞いたら、病状から考えてK病院がいいと言われ、それを和田氏に伝えたことがある。本人も同じ情報を他の方からも得ていたらしく、K病院に入院し、K病院で最後の時を過ごしたことになる。

彼の死後、私は「和田義雄をしのぶ会」をしたいと思い、『森の仲間』の同人の賛成を得、特に彼と深い交わりのあった人にも案内し、参加して頂いたことはうれしかった。

花子夫人にも喜んで頂いたと思っている。

これも余計なことと思われるだろうが、花子夫人の好意を忘れないためにも一言記しておきたい。それは、私と渡辺ひろしの二人で和田義雄追悼号を和田義雄の霊前に供えるため、自宅を訪ねた。

いろいろな話も終わって、帰ろうとした時、夫人は私たちの前に封筒を差し出し、これは雑誌の発行費用として受けとってほしいと申し出たため、こちらはびっくり。辞退しても夫人は納得せず「これは亡くなった主人の気持です」とも言われ、遂に半分だけ頂くことで夫人に了承して頂いた。私にしては、忘れられない陰の事実で、あれからもう十二、三年も経過し早いものであると実感している。

ところで『森の仲間』を発行していく過程で、同人個人が自分の研究や教育実践を一冊にまとめる形で、労作を世に問うたものに、『森の仲間』15号（昭和四十八年七月発行）に、西田良子が「鈴木三重吉の感覚的世界

『赤い鳥』をめぐって——」と、坪谷京子の「楕円形の集団読書指導について」を掲載したが、これはまた別冊の形で刊行され、両方とも大変注目された。

西田良子氏は一時、森の仲間の同人であったが、大阪国際児童文学館の中心的なスタッフとして移ったことなどから退会したが、彼女の仕事について今更述べる必要もないが、『日本児童文学研究』（牧書店）、『宮沢賢治論』（桜楓社）、『現代日本児童文学論——研究と提言——』（桜楓社）などで知られ、鈴木三重吉については、多層的視点から研究し論じたのは西田さんの研究がまとまった最初のものではないかとさえ思った。

実に詳細にわたって、作品のみにかぎらず三重吉の人間にも迫っていることに圧倒されてしまう思いで読んだことを覚えている。

彼女が大阪へ移る時、その門出を祝うといえいいのか、送別会といえいいのか、とにかく森の仲間の同人たちで、札幌弥生会館で会を持った。昭和五十九年二月十六日、その夜は大変な吹雪で参会に手間どったこと、そして主賓の彼女も吹雪で遅れて来たことが今、懐かしく思い出される。

西田良子さんが大阪に移ったその年に、和田義雄は今度は自分が永遠に遠い異界に移ってしまうとは、本人さえも予想しなかったであろう。

坪谷京子氏は小学校長として、全校あげての読書指導の実践記録である。

彼女は現在、北海道に伝えられている民話などの蒐集に努めている。

（二）

話は逆戻りするが昭和三十七年二月二十日の児文協道支部総会で、事務局長を渡辺ひろしと私が交替することになる。それまで出版部を担当して、支部の「にれの木」を発行していたのを、和田義雄が担当することになる。それで「にれの木」は12号から和田氏が担当することになったのである。

前号でもふれたが、支部会員の作品集『原っぱ』が刊行されたのは昭和三十四年で、会の出版部を担当していた私は、ほっと一息ついたおもいではあったが、何となく満ち足りない気持だった。果たして子どもたちにとっては喜ばれる図書であったのか。会員の自己満足で終わったのではないかという、かすかな疑問も抱いていた。そのため、『原っぱ』とは違った内容で、子どもたちに歓迎されるものを出版したいと考えるようになった。

そんな時に出てきたのが、郷土の読物であった。その頃北海道の歴史上の事実にもとづいた読物は少なく、必要性が言われていた。

その頃私は学校図書館協議会の人たちと顔を合わせる機会が多かった。そして話題として郷土の読物について何度も出たのである。

そのような状況が背景にあったから、『むかし話北海道』の出版が企画され、実現することになった。

この本が出版されるいきさつについて、私は日本児童文学者協会（児文協）の依頼で、機関誌『日本児童文学』（第十巻第八号・昭和三十九年八月）に書いたもので、詳細はそれに譲ることにする。

この『むかし話北海道』第一巻は大変好評で、会員の手元にあるものも希望者に売らねばならない程になり、私も一冊のみ残しただけになった。ところがそのあと昭和四十一年に「北海道文学展」が開催された時、児童文

学関係の資料となる図書などを提供してほしいということで、私もたしか十四、五点展示会場に持参した。そして文学展が終了したので、出品した図書などが出品者別に、ひもでまとめられていたのを受け取り、確認もしないで持ち帰ったが、しばらくたってから『むかし話北海道』を見る必要があったので、ひもでしばったままになっているのを見たが、出品したその本が見当たらない。とうとう『むかし話北海道』第一巻は手元に戻ってこなかった。

私にとっては、思い出深い本であるのにと腹が立ったものの、確認しないで受け取った自分にも責任があるので、あきらめるより仕様がなかった。

しかし二、三年前のことだが、古書店から送って来た古書カタログに、『むかし話北海道』第一巻がでていたので、早速買い求めることが出来て、ほっとしたのを憶えている。出版の時は二百三十円の本が古書カタログでは二千円であった。

さて、児文協道支部の事務局長を引きうけて、私は何を先ずやったらよいか考えた。

たまたま評論家の福田清人が、朝日新聞（昭和37・3・20）に、児童文学の現状として「発表の場がない不幸」と題した一文を寄稿したのを読み、当時の支部会員にも当てはまることであると考え、会員の発表の場（同人誌以外）を確保しなければならないと思った。

そんな願いが実現したのが、北海道新聞夕刊「こども欄」に「水曜こども文庫」として毎週一回ずつ水曜日に童話を掲載することになったことである。道新学芸部の担当者は、今までの童話の型を破って、新しいおもしろさを持った作品を書いてほしいという要望を私に望んで来た。

結果的には担当者の要望通りにはいかなかったと思うのだが、この連載は昭和四十年九月一日（水）から始まった。その時の執筆者の名前を列記しておく。この時は私が止むを得ずトップバッターの役を果たさねばならなくなり、「午前二時の訪問者」という題名の作品を書いた。童話らしくない作品、ちょっとミステリーめいた作品で、担当者の要望を少しでも果たせたらというおもいであった。

資料が全部ないので、執筆者の名前に欠落があると思うのだが、手元にある資料だけに頼って、名前を列記すると、

大西泰久、比良信治、浦聖子、笠原肇、黒川隆、小檜山奮男、加藤多一、坪谷京子、石丸たまき、浅野明信、滋野透子、原子修、沢田けい子、太田迪子で、ほかに何人か書いた筈なのだが、資料が散逸して確認できない。この連載の時、比良信治が書いた「赤れんがのハト」が意外な波紋を呼んだ。

比良信治の作品は、道庁舎新築工事のために取りこわされている古い建物に、住みついていたハトの安住の場所を、童話を通じて訴えた作者の願いに関係者が気づき、道庁では早速きゅう舎づくりにかかったという。

当時の新聞に大きく報道されたほんとうの話である。

これと同じ年に、渡辺ひろしが童謡詩集『にじのつらら』（私家版）を刊行したが、渡辺ひろしについて少し書きとめておきたい。

前に述べたように、児文協道支部を語る時に渡辺ひろしを避けては通れない人間であったと、私自身強く思っている。

『にじのつらら』刊行の少し前、昭和三十一年に『鳩の扇子』が鳩の扇子出版後援会の手によって刊行された。

彼は私に贈ってくれた同書の表紙の裏に「——私はこの私の遺産と記録のからをつき破って芽ぶくものを育てたいと願うのである。それが本当の私のものとなるであろうことを——」と記してあった。

北原白秋の門下生とし、「赤い鳥」、「チチノキ」によって童謡制作を続けた。また新美南吉と交流した思い出を、「にれの木」4号に書いてもらったが、その中で新美南吉が、渡辺が働いていた喫茶店へやって来た時のやりとりが、奇妙に印象深いものがあった。南吉は渡辺に「鯨の泳いでいるところを見たことがあるか？」と聞く。「ないねえ」と渡辺が返事すると、南吉は「ないか……うーん、やっぱりないか、おれもないんだ」と言うのである。鯨を見ることは現在なら、観光にもホエール・ウォッチングというのがあって、鯨を見物できるだろうが、当時はそんなことはなかった。そのあと新美南吉の童謡「島」が「赤い鳥」に推薦された。鯨を題材にした作品であった。

今、新美南吉が生きていたら、鯨見物に出かけただろうか、とふと思った。

渡辺ひろしと私との個人的交流について述べることは遠慮することにし、彼が児文協道支部の縁の下で力持ち的存在であったことは間違いない。『鳩の扇子』に次いで、昭和三十二年渡辺は『童謡への回想と私観』（自家版）を出す。

昭和二十五年七月に渡辺ひろしは札幌にやってくるのだが、奥さんを亡くしたあとであったと、いつか彼から聞いた。

その後彼が札幌で結婚したちる里夫人と会ったのは、児文協本部の第一回目の北海道講演会（昭和二十七年）の時だったという。

ちゑ里さんとの再会は偶然であった。

ちゑ里さんは昭和六年に朝鮮に渡って、むこうで勤め、結婚した。戦後家族六人で引揚げ、山梨の実家に身を寄せていたが、その後札幌に移り住んだ。ちゑ里夫人は歌人としても長い経歴の持ち主である。

渡辺ひろしはその後童謡集『ろばよ走れ』（昭和五十三年、もく馬社）、そして昭和五十八年に『渡辺ひろし作品集』（らいらっく書房）を刊行、渡辺ひろしの集大成というべきものである。また彼は昭和六十三年に自伝『野ぶどうのつる』を、予定としては第五章までを考えていたが、まず第一章を書きあげた。それを『森の仲間』26・27号に掲載した。関東大震災時の記憶にはおどろかされる。またその頃の東京の街の様子などが、目に映るようである。

また彼が童謡詩人としてスタートする動機などについても、自伝『野ぶどうのつる』は詳しく伝えている。彼が父親に連れられて夏目漱石を訪ねたことも、はっきり記憶してそれを記している。『森の仲間』に掲載したのだが、あえてここに再録しておきたい。

渡辺ひろしの父親は、夏目漱石や巖谷小波と親交があったらしく、漱石を訪ねた時の様子を『野ぶどうのつる』から、再録する。

訪問したのは大正四年十二月の末というから、渡辺さんは四、五歳の幼児。しかしその記憶力にはおどろく。少し長くなるが記すことにする。

――（略）「澤之鶴」の看板のある雑貨屋さんの筋向いの小路を少し入った左側に、漱石宅の門があった。

二、三人の新聞社か、雑誌社の記者らしい青年が漱石宅の家人と話し合っていた。

『先生は、確かにご在宅のようですが』

『いいえ、不在です』

『いや、ご在宅のほうです。もう一度見てきてください』

『おりませんですよ、先生は…』

『いらっしゃるはずですよ』

『おりませんといったら、おりません』

大きな声になった話し合いに、奥から出てきた、立派な口ひげをはやしたおじさんが、

『いないといったら、いないんだ』

記者らしい青年は、ちょっと驚いた顔つきをした。

『あれッ、先生！いらっしゃるじゃあないですか…』

『本人が不在だといってるんだから、これほど確かなことはないだろう』

そういつて、さっさと奥へ姿を消してしまった。

父は青年記者の肩を軽くたたいて、

『きょうは、帰って、出直して来た方がいいですよ』と、さとすようにいった。

あつけにとられたような顔をしている青年記者のわきを通して、父に手をひかれて、弘は座敷へ入っていった。

父は、口ひげのおじさんと、何か話し合っている。弘は、父の横にちょこんと座ってふたりの様子を眺めていた。

口ひげのおじさんは、瓶の中のつぶつぶの形が残っている苺のジャムを、スプーンですくってはなめていた。ひげについたジャムをちり紙でふいてから、半紙を二ツ折にした紙を畳の上に置いた。そして右手の親指と人差し指で鼻毛をつまんで、『うッ』と、ひき抜いた。抜いた鼻毛を半紙の上に、ピョンとたたせ、また、『うッ』と、抜いては半紙の上にピョンとたたせた。

面白いことをするおじさんだと、弘はしげしげとみつめていた。このおじさんが文豪といわれた夏目漱石であったと知ったのは、十年ほど後になってからであった。

あれから七十年後の今日、鮮やかに浮かびあがってくるのは不思議な気がしてならない。今は、つい二、三年前のことでも忘れ勝ちなのに……。

引用が長くなったが、渡辺ひろしさんが父に連れられて、夏目漱石宅を訪問したことを知る人は、『森の仲間』26・27号を読んだ者以外は多分知らないであろう。とにかく渡辺さんの記憶力のよいことに、ほんとうに驚くばかりである。『鳩の扇子』も、夫人ちゑ里さんの話によると、昭和三十一年三月札幌の幌南病院で肺の外科手術をすることになって入院中に、万一のことを考えて、少年時代から書いた作品を一枚の記録もなく、ただ記憶をたどって思い起こして記したものであったというから、恐れ入る。

ついでにふれるが、彼が二度目の入院をした時の某日、はっきりした年月日は不明だが昭和四十年か四十一年

の頃であったと思う。

私は幌南病院の病室に、お見舞に行った。

渡辺さんは、私に「ちようどいい。日塔さんも入院中だから、ちょっと顔を出して見よう」と、私を日塔さんの所へ案内してくれたことを憶えている。日塔さんとは詩人の日塔聰氏のことである。堀辰雄の愛弟子であり、堀辰雄の下で『四季』の編集にたずさわっていた。その頃彼はまだ東大仏文科の学生であった。日塔さんはソネットを生涯の柱として固守した珍しい詩人ではなかったか。

日塔さんが札幌に転居したのは、昭和二十八年で、更科源蔵氏を頼って札幌に来た。

たまたまその病院には、日塔聰氏のほかに詩人の古川善盛氏も療養中だったから、渡辺さんも心の安まることであつたろう。

日塔氏が六十三歳の生涯を終えたのは、昭和五十七年六月十六日である。そしてその翌年の命日に、稀有の詩人を『折鶴忌』の名で残そうと毎年日塔さんをしのぶ会が続けられた。発起人は最初は佐々木逸郎（故人）、古川善盛、堀越義三らの詩人連中が中心で、夫人の日塔昌子さんを囲んで飲食を共にしながら語った。更科源蔵さんの夫人が参加したこともあった。渡辺さんや私も参加していたが、最近は開かれていないようだ。

渡辺さんはその後何度か入退院をくり返したはずである。

平成三年某日、私は幌南病院入院中の渡辺さんを見舞ったが、夫人のちゑ里さんは泊まりこみで看護されていた。

それからしばらくして、再度病院へ行ったら、退院したと聞かされた。連絡してみると、夫人は看病疲れで休

養が必要となり、ちゑ里さんの長男である功一さんの家で静養されていた。

それから間もなく、渡辺さんは西円山病院へ入院し療養を続ける。私も西円山病院へ見舞いに行ったが、早く元氣になってほしいと願うのみであった。

平成三年十二月八日の朝、ちゑ里夫人からの電話で、渡辺さんの訃報を知らされた。

もう少して八十歳になるところだった。

児童文学の雑誌『森の仲間』の創刊号から24号までは、ほとんど渡辺さんの編集の労力によるものだったといえよう。

25号から私が編集の仕事を引き継ぐことになったが、29号（平成三年六月発行）まで彼は作品を発表していたのである。

作品は「オオムラサキ——てふてふのうた——」と題したもので、実際に書いたのは（平成2・3・10）と作品の最後に記されている。

おそらく渡辺さんの最後の作品だろう。

葬儀の時は風邪などのため、仲間の同人の参列が少なく、大谷、鈴木、斎藤、森の四人にお手伝いをして頂いたのが、この間のような気がする。葬儀が終了したあとちゑ里夫人や長男の功一さんと私たちが、渡辺さんのことを話しながら雑談をしていたときに、功一さんがふと口にもらした一言、「おやじはえらかったなあと思います。おやじから、やさしさを教えられました」と、今も頭の片隅に残っている。

功一さんには義理の父親に当たるのだが、渡辺さんのやさしさは、功一さんだけが理解出来るものに違いない。

葬儀の時、弔辞を読んだ私にはとてもつらい思いだけが残った。

夫を先に異界におくったちゑ里夫人も平成八年二月十二日、歌集『風花』を残して渡辺ひろしさんのところへ旅立ってしまった。

ちゑ里夫人の郷里である山梨では、山梨新聞が『風花』を中心として、山梨時代からのちゑ里さんの文学活動（歌人として）をとりあげ、ちゑ里さんの訃報を大きくとりあげた。

私たちの児童文学の雑誌『森の仲間』の同人も年齢的にも高い人が多いせいか、先行き不安という問題をかかえている。

これまで和田義雄、渡辺ひろし、もう一人速水誠一さんも平成六年九月六日、転居先の藤沢市で亡くなられた。九十三歳という高齢であった。速水さんは作品集『あかだも学校の四季』を「森の仲間」から発行した。

昭和五十五年の発行だから、速水さんが八十歳の頃である。記憶力は年齢に関係があるが、創造力や創作力は年齢には関係ないという証拠である。

ずいぶんと、渡辺ひろしさんについて書き並べたが、それは彼が日本児童文学者協会道支部の発展に尽力したこと、即ち北海道の児童文学の振興に果たした役割は、やはり大きいものがあったからである。

表に出て目立つようなことを嫌う性格の人だったから、随分損をしたと思うが、それが彼のいいところであった。少なくとも私にはそう思える。

どの世界でも自分を目立たせたいと願う人も多いのに、渡辺さんは寡黙に徹し、こつこつと仲間のために精力をつぎ込んでいた。

それなのにすぐ感激して、涙を流す純粹さは、生涯失われなかった。

話がすっかり協道にそれてしまったが、会員の発表の場を少しでも確保したいと願ったものの、そんなに簡単に確保できるものではなかった。

でも前述した北海道新聞夕刊に掲載することになった「水曜子ども文庫」の連載が始まる二年程前から、某商社札幌支店のPR誌に会員の作品を毎月一編ずつ掲載することが出来たし、また、札幌市公報『さっぽろ』に札幌の歴史物語を昭和三十七年九月号から僅少のスペースではあるが、発表の場を確保したことも当時としてはかなり苦勞して確保しなければならなかった。

ところで「水曜子ども文庫」の掲載がスタートする時期と同じくして、児文協道支部の解散問題が浮上していた。

これは昭和三十九年度の支部総会（昭和40年3月27日）において緊急提案された問題であった。支部を解散する理由については、三十年以上も過去のことなので、記憶から欠落した感じで詳しいことはほとんど憶えていないが、児文協本部と支部との関係で、支部を重大視していない本部のやり方に疑義を抱いたことからではなかったかと思っている。

支部には当時本部会員と支部会員の二種類の会員で構成されていたこともあって、支部に対して本部は積極的に出版社からの図書刊行の際に執筆分担させるとか、あるいはまた協力体制を組織するということをしていなかったからという理由もあったし、支部自体も一体化して二種類の会員組織でなく、本部会員として活動の基盤を固めたいという意向が強かったのではなかったか、と思っている。しかし、もう相当むかしのことだから、はっき

りしたことは言えないが、ともかく、昭和四十年九月六日付の文書が手元にあるので、それによると、支部長玉川雄介の名で、「日本児童文学者協会北海道支部解散通告」が各会員に配布され、その少し前の七月十五日付で、東京本部に「支部解散宣告」を送った。

手続きとしては最終的に会員の意見を取りまとめ新支部を結成する方向をとることになった。従来と異なる点は、会員は全員本部会員であること、もう一点は本部の支部に対する方針が全く改められ、支部の存在を高く評価する態度が打ち出されたのである。

支部としては、従来の支部のみの会員に対しては、早期に活動の実績を認めて本部へ推薦することにしたのである。

昭和四十年の時点で、それまで十数年にわたって、北海道の児童文学界に、常に創作と児童文化推進の役割を続け、教育的にも尽力してきた児文協道支部が一旦解散することによって、変則的な部分が改められ、本部としても各会員に対して指導的な面を考慮すると共に、結成された支部に多くの福利と権限をも付与することが決定されたのである。

この状況をふまえ、ここにおいて新しく北海道支部を設置すべく、この時児文協の会員資格を有する二十二名に呼びかけた。

この呼びかけの趣旨は「日本児童文学者協会・北海道支部設立について」と題する趣意書に述べられている。発起人として玉川雄介、長野京子、入江好之、和田義雄、井上二美、大西久男、沢田慶子、坪谷京子、速水誠一、比良信治、八森虎太郎の十一名の連名で発送したのである。

この頃、児文協道支部はこうした変動が一時的ではあったものの、現在こうした事を記憶している者はほとんどいないのではないかと思うのである。日本児童文学者協会（児文協）の協会通信No.11には、支部日より欄に「北海道支部が新結成」の記事と、定例理事会の報告事項に、北海道支部は解散し、改めて会員のみで新しく支部を結成したと記され、支部長・入江好之、副支部長・大西久男、事務局長・加藤多一と報告記事が載っている。

実はこの時私は事務局長を辞退したのである。家庭的な事情のため、時間的にも無理な事態にあったので、迷惑をかけたら困ると思ったからであり、後任に加藤多一が引き継いだ。私は副支部長という名目だけの役で、私的な事情を回避することが出来た。

この頃の自分を思い出すことも、ないわけではないが、人間にはそれぞれ、どんな人にも、俗な表現で言えば悩みや問題をかかえ、それとつき合って生活しているものだということを、考える機会となったと思うことがある。

どんな人間でも、悩みを持たない人はいないのだと実感した時期であった。

（三）

記述のしかたが、年代的に前後したりして理解に苦しむ点があることを詫びながら、記述のまとめに入りたいと思う。

昭和三十年代に道内において発行された児童文学の同人誌も、児文協道支部の機関誌を別にすると、数誌にすぎない。

その中でも特筆すべきものは、『まゆ』と『樹』であろう。『まゆ』の主宰者笠原肇のすごいところは、児童文学作品もさることながら、彼の教育実践者としてのすごさである。

彼の著書『俳句の授業』（一莖書房・昭和56）、『評伝・斎藤喜博』（一莖書房・平成3）、『斎藤喜博・国語の授業小事典』（一莖書房・平成6）などを手にしただけでも圧倒されるのに、それ以外に中国語を勉強し、研究会の責任者として活躍する笠原氏に、私は児童文学の実作者以上に魅力を感じる。

国語教育の実践を通しての、児童文学の創作が今後どのように発展していくのか、私のような無力の人間にとって、楽しみの期待出来る人である。

笠原氏のもう一つのすごいところは、自分だけの創作活動でなく、ほかの人を育てていこうという熱意の強いことである。

そのために『まゆ』を通して同人の作品を指導し、読む会を続けるなど、超人的な活動というしかない。

またこうした点から考えると『樹』の主宰者でもある滋野透子さんも、同人仲間の向上に力を注いでいる。同人誌の主宰者であるがために、注入する労力や精力は相当なもので、そのほかに実作するという大変さは想像以上である。

私は現在の北海道における児童文学の状況については、ある意味では不案内である。

というのは児文協の会員を退いたのは昭和五十年頃であったと思うが、そのため現在の児文協支部の動静などはほとんど分からないからである。

生意気なことを言うようだが、ちょっと考えることがあって、退会したのである。

それから四半世紀過ぎたから、当時と現在との差異は想像以上であるに違いない。

私が児文協から脱会する少し前だった。

児文協道支部の若手である笠原肇、加藤多一氏たちが新人たちが自己をきたえる機会をつくらなければだめだ、ということで、児童文学に関心を持っている人たち（主婦やグループに属している人など）に呼びかけ、最初は児文協道支部の会員がグループの人たちの実作のお手伝いをしながら、子どもたちに香り高い児童文学作品を贈ると共に、北海道における児童文学運動の興隆に資するという、大変なねらいをかかげた。そのために「若いのが集まって渦巻きを起こそうじゃないか」というのがきっかけで、「北海道児童文学の会」が旗あげをしたと、長野京子さんが書いている（「原野の風」最終号）。

最初の集まりは、今はないが、その当時あった果物店（ふじい果物店という名前か？）の二階にあった喫茶店であった。

割に広い店内であったことを憶えている。何人集まったか記憶はないが、主婦の人たちが多かったように記憶している。

「北海道児童文学の会」のねらいも、ひょっとしたら、児文協道支部のねらいと同じようなものに思われて、私はその会に入れる力を、児文協道支部に注ぐことも大切なような気がして、「北海道児童文学の会」には入会しなかった。しかしこの会の活動力は、大変すばらしいものがあったと評価したい。しかしやがて外部へと発展し、会員流出につながったという。

そんなことから、先細りという状態になり、総会の結果、「初期の目的は果たしたから解散しよう」となった

ようである。

平成七年八月に『原野の風』33号（最終号）を出して解散した。

二十五年間の中で、その果たした実績も大きいものがあつたであろう。

だが、初期の目的は果たしたとする考え方に、私は疑問を持つ。ほんとうはこれから真の目的を果たすための「児童文学の会」の役割が存在するのではなからうか。

これは外部の者の身勝手な感想にすぎないことであることも付記しておく。

「原野の風」が創刊したころは、前にも書いたが札幌市内でも同人誌は数誌に満たなかった状態であつたから、この「北海道児童文学の会」の旗上げは、多くの共鳴を呼び起こしたものと思う。

昭和三十年代半ば頃には、札幌にも「札幌子どもを守る会」が誕生し、活動を開始していたから、母親の関心も子どもの読み物に対する意識が高まっていた頃でもあつた。

そのようなことから、『子どもの問題を明らかにする懇談会』を、札幌子どもを守る会で企画し、第一回「マスコミと子ども」というテーマで、アメリカ文化センターを会場にし、市内の母親、教師の参加で行われたが、この時の後援団体に児文協道支部も加わっていた。

アメリカ文化センターが市民会館の東側に建っていた時であるから、随分むかしである。

この時の特別講演の演者はその時の道新論説委員の大内基氏、報告は札幌市教育指導主事であつた安藤鉄夫先生、それに私が子どもの読み物について話した。この時はいぬいとみこの『ながいながいペンギンの話』をしたように記憶している。

そのあと懇談に入り、資料提供は学芸大学札幌分校（現教育大札幌校）児童文学研究会であった。

この資料が、前述した学芸大学文学研究会の「研究資料No.1」だったと思っている。懇談の司会は学芸大学（現教育大）の船山謙次先生であった。

こうした情勢の中で、児童文学への興味関心が高まっていくのは当然であったとも言える。実作者の仕事については、もうすでに既刊の書物に紹介されているから、ここで述べることを避けることにしたいが、現在では道内で発行されている同人誌の数は、相当数にのぼるだろう。

実作者として著書を刊行した人もかなりの数になるのではないか。

私事になるが、私はどちらかといえば、はじめ頃は、作品の材料を郷土の歴史から採るものが多かった。そのため、そのような資料を探索していくうちに、気がついたことは、医療に関する資料や記述が、市町村史や郷土史には少ないことであった。

そのため、自分でそのような資料を探し求めていくうちに、いつの間にか医療史の研究にはまってしまうということになったのである。

今の自分はまだ北海道の医療史研究から、足を抜くことが出来ないでいる。一方児童文学に対する願望も捨てられない心境にある。ついこの間、「北海道児童文学」72号の頁をパラパラと読んでみると、写真を掲載した頁が目に入った。

加藤多一氏の「北帰行」を祝う会という一枚の写真が目に入った。昭和六十一年六月二十六日となっている。加藤多一氏が市役所を辞めて、稚内にある北星短期大学へ行ったのはこの時だったかと、ふと思いついた。そ

向け図書の中でも、私はこの『ハイリブの石』と題された、モンゴルの民話を翻訳し、子どもたちに紹介したことを高く評価したい。

私たちはモンゴルといえば、大草原と組立式住居（パオ）を想像してしまうが、かれら遊牧民たちは、民話や叙事詩を記憶して、子どもやあるいは孫たちに語り伝えることも知り、かえって日本のアイヌ民族に似た所があるように感じ、親近感を覚えるのである。

この視点からもう一人、私は特に友田多喜雄氏の活動を挙げてまとめにしたい。

だが彼の仕事を児童文学の枠で考えることは間違いであると思うが、詩人友田多喜雄の『ちいさなものたち』、そして『仔馬／羊たち』はいずれも大人だけでなく、子どもも読んでほしいし、母親が子どもに読んで聞かせてほしい、ほんとうにすてきな詩である。だから私は彼の詩作品をあえて挙げておきたかったのである。

この二冊は詩画集で、前者の版面は清水敦氏（札幌在住）、後者は香川軍男氏の版面によるものである。二冊とも児童文学の枠を通り越した作品として私の目に映るのである。

『仔馬／羊たち』に寄せた谷川俊太郎の言葉「愛するもの」と題したおしまいに、こう記している。——この本は創られたものであるが、同時に実ったものでもある——と。

児童文学という限定された枠の中で考えた場合でも、このことは当てはまりはしないだろうか。創るだけでは意味がないのではないか。それが何らかの形で実った時こそ、意味があるのだろうと考えられるのだが…。

『ちいさなものたち』にも、谷川俊太郎は次のような言葉を贈っている。

——ちいさなものたちは、私たちの心と世界との間にあって焦点のような働きをしていると思う。それらに目

をこらすことは、小さなものを孤立させはしない。むしろ反対に詩人も画家もそれらを生み出した巨きなものと見えぬものへと目を開くのだ――。

身辺にある小さなものを、常に優しい視線で見つめ、そして仔馬や羊をこよなく愛した詩人友田多喜雄氏の世界は、小さなものたちへの共感から成立しているのだと思うと、私は勝手に彼を児童文学の枠組みの中に入りたい欲求さえ抱くのである。

本稿のさいごを、児文協道支部とか、児童文学の同人誌〇〇〇とか称するわずらわしさから離れて、自分の希いをひたすら追求する極く一部の人であるが、その人を取り挙げて、私の身勝手な物言いを終わりたいと思うのである。

谷川俊太郎の言葉のように、北海道の児童文学が創られるだけでなく、実るのはこれからが正念場を迎えるのかも知れない。